

現代詩

出席者

吉田漚生（司会）

中村稔

分銅惇作

大岡信

原子朗

えたいのしれない駱駝ラクダの背中にゆきぶられて

おれは地球のむかふからやつてきた旅人だ

病氣あがりの三日月が砂丘の上に落ちかかる

そんな天幕てんとの間からおれはふらふらやつてきた仲間の一人だ

何といふ目あてもなしに

ふらふらそこらをつろつてきた育ちのわるい身なし児こだ

ててなし児だ

合鍵かぎつくりをふり出しに

拔取り騙りかたかた掻かきかひひ樽たるころがしまでやつてきた

おれの素姓すせいはいつてみれば

暮あひなしのいつほん道 影絵芝居のやうだつた——三好連治「駱駝の瘤にまたかつて」

シンポジウム 日本文学

20

現代詩

田原重雄

吉田熈生(編集)

中村稔

分銅惇作

大岡信

原子朗

『日本文学』

20

司会者の瞭解により検印を省略します 5312

シンポジウム日本文学20

現代詩

1900円

昭和53年12月5日 初刷印刷

昭和53年12月10日 初刷発行

司会者 吉田 熙 生

発行者 鶴岡 陞 巳

発行所 株式会社 學生社

東京都千代田区麹町局区内九段南2-2-4

電話 03(263)2611(代) 振替・東京1-18870番

編集担当 土屋 晃 三

落丁・乱丁本はおとりかえします

Printed in Japan

現代詩

出版者

吉田熙生（司会）

中村稔

分銅惇作

大岡信

原子朗

えたいのしれない駱駝^{ラクダ}の背中にゆさぶられて

おれは地球のむかふからやつてきた旅人だ

病氣あがりの二日月が砂丘の上に落ちかかる

そんな天幕^{てんと}の間からおれはふらふらやつてきた仲間の二人だ

何といふ目あてもなしに

ふらふらそこらをうろつてきた育ちのわるい身なし児^こだ

ててなし児だ

合鍵^{あひかぎ}つくりをふり出しに

抜取り騙^{かた}り掻^{かっぱち}ひ樽^なころがしまでやつてきた

おれの素姓^{そせい}はいつてみれば

幕あひなしのいつぽんど 影絵芝居のやうだつた——三好達治（駱駝の癡にまがつて

シンポジウム 日本文学

20

現代詩——目次より

●口語詩の成立

言文一致と口語詩

光太郎の場合

『明星』と『アララギ』

●大正から昭和へ

民衆詩運動と大正ヒューマンイズム

詩壇の成熟と芸術派の人々

大正詩と現代

●昭和詩の展開

詩と映画——カメラ・ライの方法

『詩と詩論』の功罪

三好達治の表現意識

草野心平の世界

知識人の「放浪」

●戦後詩の出発

文語詩の遺産

戦後における詩人の生きかた

荒地以後

「シンポジウム」日本文学——現代詩・目次

第一章 口語詩の成立……………九

《報告》 中村 稔

口語詩と文語詩……………	三
言文一致と口語詩……………	二〇
蒲原有明と自然主義……………	二六
光太郎の場合……………	三三
「明星」と「アララギ」……………	三八
口語詩の二重性……………	四〇
茂吉について……………	四四

第二章 大正から昭和へ……………五

《報告》 分銅 惇 作

民衆詩運動の再評価……………	五
民衆詩運動と大正ヒューマニズム……………	九
民衆詩派の思想と背景……………	三三
「民衆」の觀念……………	六六

民衆詩派の役割……………	七
民衆詩派の表出意識……………	七
民衆詩派と金子光晴……………	八
詩壇の成熟と芸術派の人々……………	八
芸術派の世紀末意識……………	九
日夏耿之介と北原白秋……………	九
大正詩と現代……………	一〇

第三章 昭和詩の展開…………… 一〇

≪報告≫ 大岡 信
 ≪報告≫ 吉田 潤生

昭和詩と大正詩……………	一四
「農民的心情」とプロレタリア詩……………	一三
詩と映画——カメラ・アイの方法……………	一四
『詩と詩論』と西協順三郎……………	一五
昭和初期の詩と外国文学……………	一六
『詩と詩論』の功罪……………	一四

詩史の遠近法	一四
三好達治の表現意識	一四七
歴史と個性	一五
三好達治と旅	一五六
三好達治の戦争詩	一五九
晩年の三好達治	一六二
『測量船』の可能性	一六六
伊東静雄について	一六九
草野心平の世界	一七一
知識人の「放浪」	一七四

第四章 戦後詩の出版

〈報告〉 原 子朗

戦時下の文語詩	一八四
戦後の詩と文語	一八六
文語詩の遺産	一八七
『荒地』について	一九一

戦後における詩人の生き方……………二〇四

『荒地』以後……………二三

戦後詩における口語表現……………二五

あとがき……………三二

索引……………三三

第一章 口語詩の成立

第一章 口語詩の成立

報告 中村 稔

川路柳虹が「塵溜」をふくむ「新詩四章」を同人誌『詩人』に発表したのは、明治四〇年九月であつた。高村光太郎が「根付の国」を書いたのは明治四三年であつた。詩集『月に吠える』巻頭の「地面の底の病氣の顔」が「白い朔太郎の病氣の顔」という題で『地上巡礼』に発表されたのが大正四年三月であり、同じ萩原朔太郎の「かなしい遠景」の初出は『詩歌』の同年一月である。つまり、川路の実験的習作が発表されてからわずか数年の間に、わが国におけるいわゆる口語自由詩はじつにみごとに形式を獲得したといつてよい。高村や萩原のこれらの作品には、文語詩では表現されえない抒情や感傷が、そのかたちを与えられて定着された。そして、萩原のばあい、「薄暮の部屋」(大正六年一月『詩歌』に初出)にはじまる『青猫』(大12)の諸作で、口語自由詩は、まことにゆたかで自由な結実をとげている。

その当時からかぞえて六〇年に近い。しかし、わが国の現代詩の歴史における口語詩の成立は、そういう時間の経過だけから説

明しがたいいくつかの問題を残している。

高村についていえば、「根付の国」が収められた『道程』(大3)の数多くは文語で書かれているし、晩年の詩集『典型』(昭25)にいたるまで、彼は生涯をつうじて、すくなくとも口語詩と並行的に文語詩を書きつづけていた。萩原の『氷島』(昭9)における文語詩への回帰は、よく知られるとおりである。かれらより後の世代の詩人たちを考えてみても、三好達治、伊東静雄、中原中也らによる戦前の抒情詩の傑作の数多くが文語によって書かれていることも、まぎれもない事実である。これらの文語詩はいうまでもなく明治期のそれとはきわだちがっているが、たとえば、定型的な音数律とは無縁になっているが、なお、本質的なちがいはあるのかどうか。文語詩と完全に絶縁したのは、『荒地』以降の戦後詩人たちがはじめてであつて、じつは文語詩は数十年にわたつて余命をたもってきたのだが、それはどうしてなのか。

戦後において詩を書いてきた者のひとりとして、私じしん、何

故じぶんは文語詩を書かないのか、という疑問をもつことがある。その解答をじつは私は用意していない。萩原は、口語詩は男性的な感慨を表現するのに適していない、という趣旨のことを述べていたはずである。これはそのままにはたやすく承認しがたいが、しかも、口語詩によって、私たちが、文語詩がもっていた表現の多様性というものを失ったことはまちがいないようである。たとえば、過去形を例にとってみても、「鳥のとまりけり」にあたる表現として口語では「鳥がとまった」としかならないが、文語であれば「鳥のとまりたり」、「鳥のとまりぬ」、「鳥とまりき」等々さまざまな変化がありうる。これに係結をくわえれば、文語における終止形は、口語との比較でいえば、ほとんど無限といつてよい。口語詩の単調さは、あるいは口語詩の散文化というものは、こうした表現形式の貧しさに、原因の一つを求めることができるのであろう。しかも、何故、文語詩が私たちの表現形式たりえないのか。

このことは、じつはわが国の抒情詩の問題とも関連しているようである。一方で、民衆詩派から社会主義的な傾向への傾斜が、現代詩の潮流として存在し、他方で、「うた」よりは「影像」という大きな潮流が存在した。その間にはさみうちにされた抒情詩人たちが、閉された狭い世界での反動として、文語詩に向った。巨視的に見れば、三好や伊東らを念頭においてみると、そういう

図式化が、成り立ちうるように思われる。そうとすれば、民衆詩派にはじまる潮流や、『詩と詩論』以降の潮流が口語詩の成立、口語詩の発展にどのような役割をはたしたかも、吟味しなければならない。

短歌や俳句の世界で文語が依然として確平たる表現形式であるのに、何故現代詩においては、口語詩が成立しえたのか。その解答はおそらく、現代詩とは何かを問うことからしか求めようがない。しかも、わが国において『口語』詩とはいっても、これは小説とか、批評とかいった表現形式をふくめた文学一般にいうことはない。このことは、欧米の言語表現と比べて、はつきり異っている特徴である。そういう意味で、文語といひ口語といひても、同じ文章語の枠の中のちがいにすぎない。それでも、文語詩から口語詩への移行には、伝統からの自覚的な断絶があるが、その断絶がいっただいという意味をもっているか。

わが国における口語詩の成立とは何かという問いは、おそらくわが国において現代詩とは何かを問うことに、ほぼ、ひとしいのである。

口語詩と文語詩

吉田 まず口語詩の成立という中村さんの問題提起を中心に討論を進めていきたいと思っています。

要するに口語自由詩が成立してから短期間の間に多くの成果があがったように見えるが、実際は戦前までは口語詩の流れと文語詩の流れと二本立てで重なってきた。そういう意味でほんとうに口語詩が成立する、つまり文語詩がなくなるという条件を満たして、口語詩が成立するというのは戦後のことである。この認識からいろいろと問題が出てくるだろうと思うんです。まずなぜ二本立ての流れでなければならなかったか、それから、ではなぜ戦後詩においては、文語詩がなくなつたのか。その結果それぞれ失つたもの、得たものというのはどういふものなのか、といったような問題提起がなされていると思います。差当ってこの報告の、補足ないしは説明がありましたら、中村さん、お願いします。

中村 《報告》には、一人の現代詩の読者として、また作者として、ぼくが思っていた疑問を書いたわけです。どういふ答えがいままで国文学者の間で、あるいは現代詩史家の間で出されているのかということは、あまり知らないのですが、疑問に思っている点をもう少しぼく流に整理していえば、一つは俳句とか短歌の世界では、口語俳句とか口語短歌という試みが一方でなされながらも、たんに試みに終わって、口語俳句、口語短歌は決して短歌や俳句の主流たり得なかった、その成果も非常に貧しい、にもかかわらず詩と呼ばれる世界だけでは、なぜ口語詩が主流となつたのかということなんです。それに引き続いていまの吉田さん御指摘のように、口語詩と文語詩とが併存するという形が数十年にわたって続いた、それはなぜなのかということ。さらに現代詩の流れを考えていくと、いわば民衆詩派からプロレタリア詩への流れ、『詩と詩論』に始まって、『荒地』あるいはシュールレアリスムの影響を受けた大岡さんたちの『鰐』に続くような流れ、そういういくつかの流れが口語詩の成立にどういふ役割を果たしたのかという問題が考えられます。だからぼく自身の素朴な感想として、これは四番目になるわけけれども、どう考えても表現形式としては文語詩のほうがは



大正9年8月『日本詩集』(1920年版)出版の集まりでの川路柳虹(前列右端)。その左は佐藤惣之助

るかに豊かなのではないかと思われるんです。それを犠牲にしてなぜ口語詩が成立しなければならなかったのかという問題意識を持っています。原さんが言っておられる二重言語の問題というのが、多分問題に対する回答の一つであろうと思いますが、そのほかにもどういう答えが一応出ているのか、あるいは出ていないのか、二重言語論というものがほんとにそうなのか、というようなことを今日ぼくは教えていただきたいと思うのです。

吉田 それでは原さんのほうから二重言語論の骨子を簡単に話したいだいて、それから中村さんの疑問にどこからでもけっこうですから、アプローチしていただきたいと思いますが、大体問題を二つの角度から、つまり詩論的な面と詩史的な面とを交錯させながら話を進めていったらどうかと思いますが、それからもう一つ、せっかくの機会ですから、詩を詩として孤立させず、広く言語表現の一環としてとらえるということを念頭に置いていただければ、いっそう意義ある討論になると思うんですが。

原 二重言語論とぼく言った覚えはないんで、二重語法というふうに言っておりますけれども。その前にやはり中村さんの、整理されている趣旨的な内容の中で注意しなくてはならない点を先に言ってよろしいですか。

たとえばわずか数年の間に口語自由詩がみごとに形式を獲得した。そして文語詩では表現できない叙情や感傷が形を付与されて定着されたと書いておられるのは、そのとおりではありますが、明治四〇年の川路柳虹の口語詩の試作の成功から四三年の光太郎の「根付の国」、あるいは大正四年の朔太郎の『地上巡礼』に発表された「白い朔太郎の病気の顔」に至る七、八年の間には、自然主義の直接の影響と思われますけれども、早稲田詩社というのが明治四〇年に結成されているわけです。これは間もなく解散して、



萩原 朔太郎

大胆な口語の試みが、自前の創作詩よりも行なわれやすいというところがあるのかと思います。（これは『新体詩抄』らしい訳詩の試みにいえることです。）そういうまあ詩史上のメインテーブルにつかないようなところで、口語詩の促進といいますか、可能性の発掘がかなりの成果をあげている。そういうことを重視すれば、中村さんのおっしゃる通りに七、八年の間に口語詩がぐっと、文語詩で表現できなかった、あるいは文語詩とはちがった叙情や感傷を表現できるようになったということも、直接の連絡や連携はなくても、一種の時代的な要請として、陰のところでずいぶん進んでいたというふうに私はまず考えているわけです。ここで拓次の影響ということを一言しますと、中村さんの推す「薄暮の部屋」をはじめ、朔太郎自身も言っているように拓次の影響がかなり強くて、特にその口語自由詩、口語表現においてずいぶん影響されているというようにいえるのではないかと。

それでは、文語詩では表現できない叙情や感傷、と中村さんが書いておられるのは、簡単にいうといわゆる明治期とはちがった屈折した内面性というか、隠微な内的リアリティというものが表現できるようになったということになる

そのあと後身という形で自由詩社というのが四二年の五月に結成される。これは一年余りしか続きませんけれども、『自然と印象』というパンフレットは有名で、この中に三富朽葉や、少しおくれて山村暮鳥、福土幸次郎なんかも暮鳥と一緒に入っております。こういった連中の口語詩というのはやっぱり非常に大事なんで、直接的にも暮鳥の影響は朔太郎にもあるわけですから全然結社に加わっておりませんが、私が先年ちょっとくわしく書いたものに大手拓次という詩人がおります。この拓次とか朽葉、あるいは暮鳥にしても、いずれも直接外国の詩で勉強している。外国の詩の翻訳なんかをやっていると、意外に